

ふないうれいのおとむらい

マムドルチア

寺子屋の入っている長屋のある通りの真ん中らへんに、もういい年をした爺さんがやっているやすい蕎麦屋があり、ワーハクタクの教師や博麗の巫女などは夏になるとピタ銭を握ってこの店を訪れ、漬垂れの小僧つ子やら齒の抜け果てた年寄りやらサボリの死神やらに混じってざる蕎麦をくらしい蕎麦湯を飲むのが常だった。

「あんたアそろそろ逝かれるのかい？」死神がそう訊ねると爺さんは毎回決まって

「まだ一工夫足りない」と答えるので、それを聞いて彼女はそれじゃもう一杯頂いてからにしようかねえ、と返すのだった。

実際爺さんはながく蕎麦打ちをしてきたためか喘息気味で、時々呼吸するのも苦しいような素振りを見せることもあった。しばらく前に竹林に住む薬師が、蕎麦を打つのを止めて少し長く生きるか、少し短く生きて蕎麦を打つか選べるわよ、と言った時も

「まあ蕎麦でも食べていきな」と答えているので覚悟は出来ているようだったが。

さてそんなやりとりを幾たびか繰り返し、ある年の初夏の頃に爺さんが、

「工夫がついたな」と言って打った蕎麦はたいそう美味しく、その日

客で来ていた教師と死神と門番と人形遣いと薬師と舟幽霊はつるつると蕎麦を啜るとおかわりまでし、締め蕎麦湯を飲み干し口を揃えてごちそうさまでしたと両手を合わせた。そしてその日の夜遅くにはもう爺さんは眠るように息を引き取った。

べつだん確かめる必要もないようなものだったが、八意永琳は爺さんの脈を取り瞳孔の散大を確認した。

「よく生きてよく死んだわね。立派だったわ」彼女はそう言う爺さんの両手を取って胸元で合わせた。爺さんには息子と息子の嫁と孫が五人いて、息子と嫁はおいおいと泣いていたが孫達はまだよく状況が飲み込めていないようだった。

小野塚小町が爺さんの魂とともにゆるりとした足取りで蕎麦屋を出て行く。その背中に

「あまり急いで行かないでくれよ」と上白沢慧音は声をかけた。死神が答える代わりに片手を振る。喘息だったものの魂を急かしても詮無いことだろう。

長屋の住人達の中でも宵っ張りの連中がぼつぼつとお悔やみにやっつけて爺さんの亡骸を取り囲む。人間だけでなく妖怪もいた。

「この人の打つ蕎麦は美味かった」